

経口薬の誤薬に影響を与える要因に関する疫学的研究

東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科

高橋 静子

背景 (Background)

医療機関において、医療事故への防止対策は重要な課題となっている。中でも薬剤に関連する事故は最も多く、死亡もしくは重篤な状況に至る可能性が高い。これまで、誤薬に関する研究は数多く行われているが、コホートの研究では発生プロセスに視点がおかれ、インシデントレポートを対象にした研究では、抽出された項目が誤薬の要因かどうかのリスク評価は明らかではなかった。

目的 (Objective)

内服薬の誤薬に影響を与える要因をケース・コホート研究にて評価する。

方法 (Methods)

対象は2011年7月1日から2012年6月30日の期間に1,000床の私立総合病院に入院し、経口薬の内服を処方された患者とした。ただし、14歳以下の乳幼児・小児は研究の対象から除いた。経口薬の内服を処方された患者の対象(コホート)からランダムにサンプルした患者(サブコホート)と誤薬が確認された患者(ケース)について、関連する情報を診療録およびインシデントレポートから収集し、誤薬の発生と各項目との関連性を因子分析した。これらの結果から比較的影響を与えていると思われる項目を説明変数にして、ケース、サブコホートを示す項目を目的変数とした多変量ロジスティック回帰分析を行い、各項目と誤薬の発生との関係を分析した。

結果 (Results)

分析の対象となった症例はケースが203例で、サブコホートが196例であった。 χ^2 検定において少なからず関連性を認めた17項目を説明変数に、誤薬の発生を目的変数にした多変量ロジスティック回帰分析を実施した。誤薬を起こしやすい項目は、保管場所の異なる薬剤がある、日常生活に支障のある視力障害がある、検査や術前術後などに伴い中止や再開があるであった。薬剤数については、その数が1剤増えると誤薬の発生リスクが1.42倍になることが示された。逆に誤薬を起こしにくくしている項目は、条件(血圧・疼痛・不眠時など)に応じた指示がある、服用時点が食後薬・眠前薬、処方日と開始日に差がある、入院時に持参薬がある、であった。

結論 (Conclusions)

今回の研究目的は、ケース・コホート研究により誤薬に影響を与える項目を抽出することであった。399例を分析した結果、誤薬に影響する因子として、保管場所、患者の視力、投薬に関与する看護師の行動、服薬のタイミング、薬剤数が影響していることが明らかになった。誤薬を回避するためには薬剤保管の体制を見直すことや薬剤師の介入と連携の強化が重要である。薬剤を患者に正しく投与するためには、指示や処方と看護師の実施記録が一体化し、最新の指示が看護支援システムに組み込まれる電子カルテシステムの開発が望まれる。

キーワード (Key Words)

誤薬 要因 ケース・コホート研究 多変量ロジスティック回帰分析